

本日の箇所には、エルサレムからエマオという町へ向かう2人の弟子に、復活のイエスが現れるという場面が記されていました。エマオへの道中で、イエスについて話し合っていた二人の顔は「暗い顔をしていた」（17節）とあります。不可解です。なぜなら二人は、イエスが殺されたことだけでなく、墓が空であり、「イエスは生きておられる」（23節）と伝え聞いたことについても話し合っていたからです。少しは期待の表情を浮かべても良かったはずですが。にもかかわらず二人の表情が暗いままである要因は、「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました」（21節）という言葉に言い表されています。言外に「しかし、今はその望みを失いました」という気持ちが感じられます。二人がイエスに望んでいたのは、自分たちを抑圧する権力者を打ち負かし、新しい王国を建て直すイスラエルの王としての姿でした。ところがイエスは、権力者に侮辱され、迫害され、弱々しい姿のまま十字架で亡くなっていきました。二人の落胆は大きいものがあったでしょう。たとえば、「イエスは生きておられる」と伝え聞いても、あの絶望的な状況から何か期待できることが起きたとは到底信じられない心境にあったのだと思います。

二人が道中を伴うイエスの姿を見ていながらも、それがイエス本人だと気づけないのは、「二人の目は遮られて」（16節）いたからだとされています。自分のなかで「望みを断たれた」と思える状況に立たされたとき初めて、人は「見えているつもりだった」「分かっていたつもりであった」ことに気づくのかもしれません。二人の弟子は、自分達の期待の範疇でしかイエスを見ていませんでした。しかし、期待はずれのイエスの死に直面したことで、二人はイエスのことを見ているようで見えておらず、分かっているようで分かっていた事実に向き合わされていくのです。どんな状況でも、人には「見えているようで見えていない」こと、その目が遮られていることが付いて回ります。しかしそれは逆に言えば、どれだけ先の見えない状況でも、私たちの狭い視野ではまだまだ見えていないことがあるのだという真実を指し示していることでもあるのです。

行き詰まりの状況でこそ、私たちの目を開き、「なおも先へ行こうとされる」（28節）復活のイエスが伴っておられることを思い出したいと願います。「もう望みを失いました」と思えるところが、新たな始まりです。

（文責：望月達朗牧師）

